

ダニエル書 - 百八十番

ローマ、マカバイ家、そして現代の預言的接点：ダニエルの幻視に関する研究

Jeff Pippenger

2024-04-10

ウライア・スミスは、「ローマは紀元前162年に、同盟によって神の民であるユダヤ人と結びついた」と書いている。現代の歴史家の大半はその年代を紀元前161年としており、またスミス自身も同じ書物の中で二度、紀元前161年に言及している。私の考えでは、この紀元前162年への言及は誤植である。

「23節と24節によって、私たちはユダヤ人とローマ人との同盟、すなわち紀元前161年より後の時代へ、そしてローマが普遍的支配権を獲得した時代へと導かれる。」 Uriah Smith, Daniel and the Revelation, 273.

第11節と第12節は、紀元前217年にアンティオコス3世（大王）率いるセレウコス朝と、プトレマイオス4世フィロパトル王率いるエジプトのプトレマイオス朝との間で行われたラフィアの戦いの勝利とその余波を明らかにしている。

紀元前200年、17年後に起こったパニウムの戦いは、再びセレウコス朝とプトレマイオス朝の間で戦われた。

紀元前167年に始まったマカバイ戦争は、ユダヤ教の宗教的慣行を弾圧しギリシア文化を押し付けようとするセレウコス朝の試みに対するユダヤ人の反乱であった。

エルサレムの第二神殿の再奉獻は、ハヌカーで祝われる歴史的出来事を示すものであり、紀元前164年、すなわち二十三節の「同盟」の三年前に起こった。この出来事は、神殿を冒瀆しユダヤ教の宗教的慣行を禁じた悪名高いアンティオコス4世エピファネス率いるセレウコス朝の軍勢に対する、マカバイの軍事遠征の成功に続くものであった。アンティオコス4世エピファネスは、ハヌカーで記念されるその勝利の直後に死去し、これがその時点以降の歴史におけるシリア勢力の衰退の始まりを画した。

紀元前200年（ちょうどパニウムの戦いの時でもあった）に、ローマは初めてダニエル書11章の預言的歴史に介入した。そこには幻を確立する象徴がある。その歴史における意図的な影響力は、舞台裏で糸を引く教会の象徴であるイゼベルの働きを指し示している。夫アハブが、エリヤによって彼女の預言者たちが殺されるのを見ていたとき、イゼベルはサマリアにいた。ヘロデの誕生日の宴において娘サロメがヘロデを誘惑したが、ヘロデはそこにはいなかった。アメリカ合衆国の歴史においては、ツロの淫婦に象徴される教皇制は、象徴的な七十年の終わりまで忘れられている。その後、彼女は地の王たちに向けて欺きの歌を歌い始める。紀元前200年は、16節に示されているように、やがて到来する日曜法の直前、終末において彼女が王たちに公然と歌い始める時を象徴している。

紀元前161年から158年にかけてのユダヤ人の「同盟」に先立ち、マカバイ家は紀元前164年、ハヌカーで記念されているとおり神殿を再奉獻した。その3年後もなおシリア人との

闘いが続く中、マカバイ派のユダヤ人は支援を求めてローマに接触した。そのとき結ばれたローマとの「同盟」は、神の終末時代の預言を学ぶ者たちにとっての預言的な試金石となる。

歴史学では「同盟」が成立したのは紀元前161年とされているが、先駆者たちはその出来事を紀元前158年だと見なしている。ミラーが正しいのか、それとも現代の歴史家が正しいのか。ミラーは紀元前158年に六百六十六年（666）を加え、「日ごとのもの」が取り去られた年である508年に至った。どれほど探してみても、ユダヤ人とローマ人の間の同盟を紀元前158年とする歴史的裏付けを見いだすことは、實際上不可能とまではいかなくとも、きわめて困難だろう。

第十六節は日曜法であるが、その前に、この幻を確立するために、紀元前200年にローマが歴史の中へ登場する。マカバイの反乱は紀元前167年にモデインで始まり、ついには紀元前164年に彼らは神殿を再奉献した。続いて紀元前161年から紀元前158年にかけて、ユダヤ人はローマの勢力と契約を結ぶ。紀元前161年から紀元前158年は、「盟約」を確立するために必要とされた一定の期間を表している。この理解は、歴史家たちの証言と一致するかたちでこの「盟約」を特定しており、また、主の御手によって導かれ、改変されるべきではない図表とも一致している。

歴史家によれば、紀元前2世紀のユダヤやローマのような古代国家間での条約交渉の過程は、関与する具体的な状況、外交上の手続き、勢力関係によって異なっていた。通常、その過程は、一方が相手との条約または同盟の締結に関心を示すことから始まった。ユダヤとローマの場合、正式な同盟を提案するために、ユダヤがローマへの接触を開始した。

提案を伝え、交渉を開始するために、外交ルートが用いられたはずだ。これには、ローマに大使や使節を派遣してその指導者や代表者と会見することが必要だった。交渉が始まると、双方は提案された条約の条項について協議しただろう。これには、一連の会合や外交上の文書のやり取り、さらには議論を円滑にするための仲介者や調停者の関与が含まれた可能性がある。交渉の間、各当事者は相手方が提示した条項を検討し、対案を示したり、特定の条項の修正を求めたりしたかもしれない。この過程には、慎重な検討、顧問との協議、そして提案された条約の潜在的な利点と欠点の評価が伴った可能性がある。

両当事者が条約の条件について合意に達した場合、双方が合意した条項と条件を明記した正式な文書が作成される。その後、条約は各国の権限ある当局によって批准される必要がある。ローマの場合、これは元老院または他の統治機関による承認を伴う可能性がある。同様に、ユダでは、おそらくその指導部または統治評議会の承認を要するだろう。批准後、条約は実施に移され、双方にはその条項を遵守することが求められる。これには、条約で定められた各種の協力、相互防衛協定、貿易関係、その他の外交的関与が含まれる。

紀元前2世紀、東地中海地域にあるユダヤからイタリア中部にあるローマへの旅は、古代の交通手段の限界を考えると、困難で時間のかかるものだった。ユダヤとローマの距離は、選ぶ経路によって異なるが、およそ1,500~2,000キロメートル（930~1,240マイル）である。古代では海路のほうが陸路よりもしばしば速く効率的だったが、海上の旅は卓越風左右された。ユダヤの港からイタリアの港（ローマの外港であるオスティアなど）へ

船で向かう場合、風況や海流、使用する船の種類といった要因によっては、数週間かかることもあった。

ユダヤからローマまでの陸路の旅は、より時間がかかり、より過酷だっただろう。旅人は山岳地帯、谷、河川などさまざまな地形を進み、盗賊や敵対的な地域といった障害にも対処しなければならなかった。徒歩や馬車での移動には数か月を要したと見積もられている。移動時間はまた、道路の状態、宿の有無や休憩所の整備状況、そして途中で休息や補給を行う必要性といった要因にも左右された。

マカバイ派のユダヤ人がローマと同盟を結ぼうとしたとき、彼らはローマへ使節を派遣する必要があっただろう。その使節がローマ当局に受け入れられると、交渉の期間が設けられたはずである。正確な記録が残っていないため、これは歴史学上の推測にすぎないが、条約が正式に締結されたのち、それは承認のためにユダヤへ持ち帰られ、そしておそらくはユダヤ人側の受諾を確認するために再びローマへ持ち戻られたであろう。当時の同盟締結の過程が1年で成し遂げられたとはほとんど信じがたい。したがって、「同盟」が紀元前161年から同158年にかけての過程を指すという理解は、第16節の「日曜法」へと至る歴史を示す他の預言の流れとも整合する。

すべての歴史家がマカバイのユダヤ人によって開始されたことに同意している一つの「同盟」が、紀元前161年にユダヤで始まった。その目的は、ユダヤ人が、紀元前167年に反乱が始まって以来戦ってきたシリア人に対抗するための支援を求めていたことであった。その反乱は、ユダヤ人の祭司マタティアとその五人の息子たち、ことにユダス・マカバイが、セレウコス朝の支配者アンティオコス四世エピファネスによって課されたヘレニズム化政策に抵抗しようとした努力によって引き起こされた。これらの政策には、ユダヤ人の宗教的慣行を抑圧し、ギリシアの習俗と信仰の受容を強制しようとする試みが含まれていた。

反乱の引き金となったのは、モデインという村での出来事で、マタティアスがギリシアの神にいけにえを捧げよという布告に従うことを拒んだことであった。「Modein」は、「宣言する」あるいは「抗議する」を意味するヘブライ語「modi'a」に由来する。抗議のさなか、マタティアスはそのいけにえの儀式を行おうとしていたユダヤ人の背教者を殺し、彼とその息子たちは山へ逃れて、セレウコス朝の軍勢に対するゲリラ戦を開始した。マカバイの反乱は数年にわたって続き、その間マカバイ一族はセレウコス朝とその同盟者に対して数多くの戦闘を繰り広げた。兵力でも装備でも大きく劣っていたにもかかわらず、マカバイ一族はいくつもの重要な勝利を収めた。

セレウコス帝国はユダヤ人にギリシアの宗教を押しつけようとしていたが、ギリシア人は終わりの時代におけるグローバリストたちを表している。彼らの宗教は、現在、合衆国および世界に対して、銀行制度、主流メディア、教育機関、そして不法外国人の強制的移住を通して国民的区別を取り崩すグローバリスト勢力によって押しつけられている「ウォークイズム」に表現されている。アンティオコス・エピファネスがユダヤ人にギリシアの宗教を強要していたとき、その企てに協力していたユダヤ人たちがいた。マカベア人は、ギリシアの宗教に抵抗していた一つの背教したユダヤ人の階級を表しているが、他方で、ギリシアの宗教を強制する働きを支持していた、もう一つの背教したユダヤ人の

階級も存在していた。

第十六節は、間もなく訪れる日曜法と、竜・獣・偽預言者の三者連合を示している。その歴史に先立つのが十三節から十五節で、そこでは、四十節の三つの戦いが、十節（1989年）、十一節と十二節（ウクライナ戦争）、そしてパニウムの戦いとして起こる。パニウムの戦いは、地から上がる二本の角の獣が、グローバリストの宗教的・政治的思想に勝利する戦いを表している。

その戦いにおいて、アメリカ合衆国の最後の大統領は、十一節と十二節に示されているプーチンの勝利とその後の崩壊の余波に対処しなければならない。彼はロシアの崩壊の影響を收拾するためにNATOまたは国際連合同盟を結び、その同盟の歴史の中で、パニウムの戦いにおいて国際連合と対峙することになる。四十節の第三の戦いは、四十節の最初の戦いと同様のものとなるだろう。ソビエト連邦がアメリカ合衆国の経済的・軍事的力の下で崩壊したように、国際連合のグローバリストたちは「ペレストロイカ」を繰り返さざるを得なくなるだろう。ペレストロイカは、ソビエト連邦を改革しようとするゴルバチョフの取り組みの中核をなすものであったが、最終的にはソ連体制のほころびを招き、ひいてはソビエト連邦の解体へとつながった。

第三の戦いは第一の戦いによって例証されており、経済および軍事の圧力を通じて、レーガンに象徴されるトランプが国際連合に「ペレストロイカ」を強いることになる。これは再編成または改革を意味する。その再編は、国際連合という十人の王の体制の頭としてアメリカ合衆国を据えることになる。その戦いにおいて、教皇権は歴史の舞台に姿を現し、その時トランプが征服している体制の擁護者であると主張するだろう。

同じ歴史の流れの中で、トランプは、エイブラハム・リンカーンがそうせざるを得なかったのと同様に、国内での内戦に対処を迫られるだろう。その内戦は、アメリカ合衆国内の相対立する二つの背教的派閥の間で起こるだろう。一方は、ウォーク主義という宗教と哲学を受け入れた人々に代表され、両政党にまたがる進歩的なグローバリストである。他方（MAGA主義）は、自分たちは真のプロテスタントであると公言しているが、その地位は1844年に失われた。

大統領の派閥はMAGA主義に代表され、真のプロテスタント主義と憲法を擁護しているという誤った主張に基づいている。ウォーク主義が唱えるのは、母なる地球の宗教やニューエイジ、そして憲法は建国の父たちの古めかしい理念によってではなく、社会の規範の現状に照らして適用されるべきだという信念である。

マタティアス（トランプ）は、紀元前167年にモデインで始まった反乱に象徴されるように、米国内のグローバリスト・進歩派の民主党勢力の企てを終わらせるだろう。次いでトランプは、マカバイが神殿を再奉獻した紀元前164年の出来事、すなわちハヌカーの祝祭によって記念される歴史を繰り返すだろう。その後、紀元前161年から158年に相当する時期には、宗教権力と政治権力の不当な結びつきを示す教皇制の像を築くための最終的な攻勢を開始する。紀元前158年には、その同盟が、第十六節のままなく到来する日曜法の施行によって履行される。

ダニエル書11章はまず、ローマが政治的に支配権を握る経緯を示し、その後、同じ歴史を、ローマが神の民をどのように扱うかという筋で繰り返し、しかも拡大して描いている。16節から19節にかけては、異教ローマが世界を掌握するうえでの三つの障害が示されている。16節では、紀元前65年にシリアが異教ローマに征服され、続いて紀元前63年にユダヤがポンペイウスによって征服されたことが示される。16節はまた、ローマが「美しい地」に立つ時を特定しており、そうすることで同じ章の41節にある日曜法を型として表している。

征服が起こったのは、エルサレム内部で内戦が起こっていたさなかの紀元前63年〔1863年と並行して〕であったことに留意することが重要である。ユライア・スミスは述べている。「ポンペイウスがポントス王ミトリダテスに対する遠征から帰還したとき、ヒルカノスとアリストブロスという二人の競争者が、ユダヤの王位をめぐる争っていた。」

「ヒルカヌス」と「アリストブロス」という名はいずれもギリシア語起源であり、特にヘレニズム時代およびハスモン朝の時代におけるユダヤの歴史の文脈において、歴史的意義を有している。「ヒルカヌス」はギリシア語の「Hurkanos」に由来し、これはおそらくペルシア語で「狼」を意味する「hurkan」という語に起源を持つ。ヒルカヌスは、複数のハスモン朝の支配者たちによって用いられた名であった。「アリストブロス」は「最良の助言者」または「最良の顧問」を意味する。アリストブロスもまた、複数のハスモン朝の支配者たちによって用いられた名であった。「ヒルカヌス」と「アリストブロス」はいずれも、ハスモン朝時代のユダヤ史における重要人物たちと結び付けられた名である。彼らは、ユダヤにおけるハスモン王国の統治と拡張において重要な役割を果たした支配者たちであった。キリストの時代におけるハスモン王国の預言的子孫および代表者は、パリサイ人であった。

ポンペイウスがエルサレムを征服したとき、二つの政党はいずれも、その起源を紀元前167年のモディインに象徴される反乱の時期にさかのぼらせていた。ポンペイウスがその反乱に引き込まれるや、彼はエルサレム奪取を決意し、アリストブロスの党派はこれに抗戦することを決めたが、ヒルカノスの党派はポンペイウスに城門を開くことを決めた。その後ポンペイウスはエルサレムへの攻撃を開始し、三か月後、エルサレムは永遠にローマの管轄下に置かれた。

第十九節までに、第三にして最後の障害であるエジプトはローマに征服された。続く第二十節では、ダニエルがその歴史の中でローマが神の民をどのように扱うかを示し始める中で、キリストの誕生が特定される。第二十一節と第二十二節では、キリストが十字架にかけられる。第二十三節では、背教したユダヤ人が「われらにはカイサルのほかに王はない」と宣言した十字架を描写する節の直後に、紀元前161年から紀元前158年にかけて始まった同盟が特定される。ギリシャの宗教哲学の侵入に抵抗し、その結果ローマと聖ならざる関係を結んだマカバイ家に代表される背教したユダヤ人の系譜は、その聖ならざる関係の実が完全に現れた十字架の歴史を明らかにする節に続いている。

シェキナは、七十年の捕囚の後に建立された神殿に戻ることは二度となかった。最後の預言的な証しはマラキによって告げられ、紀元前五世紀半ば頃に与えられた。マカバイが世界主義的なギリシャの影響に立ち向かうまでの数百年の間、目に見える神の臨在も、預

言的な証しもなかった。彼らの反乱の初めに、彼らは、プトレマイオスとウ ज्या王の両王が、祭司の役割を果たして神殿で供え物をささげようと企てたのと同じ、まさにその反逆を成し遂げた。

ヨナタン・アッフス（別名ヨナタン・マカベウス）は、マタティアスの息子たちの一人であり、マカバイ戦争を開始した人物の家系に属し、セレウコス朝に対するユダヤ人の反乱を指導するうえで重要な役割を果たした。兄ユダス・マカベウスが戦死した後、ヨナタンはマカバイ軍の指導権を引き継いだ。さらに、彼は軍事的・政治的指導者であっただけでなく、大祭司の職も担い、ユダヤ民族の霊的指導者として仕えた。指導者であると同時に大祭司でもあるというヨナタンの二重の役割は、政治的権威と宗教的権威の双方をハスモン朝のもとに統合したという点で、ユダヤ人の歴史における重要な進展を示すものであった。彼の指導は、ユダヤの自治を強化し、ユダヤにおけるハスモン朝の支配を確立する助けとなった。

ラフィアの勝利の後にプトレマイオスが試みたまさにその罪が、マカバイの反乱のまさに初めに成し遂げられた。それは、ウ ज्या王の時代に祭司たちによって抵抗されたのと同じ罪であったが、マカバイたちが公言した神の神殿奉仕の擁護は、教会と国家の結合の誤った反逆的な発現であり、そのようなものとして、今やバイデンのグローバリスト的なウォークイズムの浸食に対抗してトランプ支持のために結集しつつある背教したプロテスタントの反逆を予表している。

聖書は、彼らをその実によって知るようになるかと教えており、キリストの時代におけるパリサイ人は、マタティアスに始まるハスモン朝の最後の残存勢力であった。マタティアス、そして彼が開始した反乱は、パリサイ主義の実を結んだのであり、それはまた、「Make America Great Again（アメリカを再び偉大に）」という概念を支持している背教したプロテスタントたちにも見られる。アメリカが偉大であったのは、憲法が教会と国家とを互いに分離しておくものとして理解されていた時であったが、ハヌカーの祭りによって記念される勝利によって表徴される偽造の奇跡の時に、日曜法制定の運動が公然と姿を現すのである。

次回の記事でこの研究を続けます。

これまで、第三天使のメッセージの真理を掲げてきた人々は、しばしば単なる危機をあおる者だと見なされてきた。宗教的不寛容がアメリカ合衆国で支配権を握り、教会と国家が結託して神の戒めを守る者たちを迫害するようになるという彼らの予言は、根拠のないばかげたものだと断じられてきた。この国はこれまでと変わることなく宗教の自由の擁護者であり続け、決してそれ以外のものにはならないと、自信をもって言われてきたのである。だが、日曜遵守の強制をめぐる問題が広く取り沙汰されるにつれて、長く疑われ信じられてこなかった出来事が近づいていることが見て取れ、第三天使のメッセージは、これまでにはなし得なかった影響を生み出すだろう。

すべての時代において、神はご自分のしもべたちを、世にあっても教会にあっても罪を戒めるために遣わしてこられた。しかし人々は自分たちに耳ざわりのよいことばが語られることを望み、純粹で飾り気のない真理は受け入れられない。多くの改革者は、その働きに着手するにあたり、教会と国家の罪を非難することについてはきわめて

慎重に臨もうと決心した。彼らは、清いキリスト者の生活の模範によって、人々を聖書の教理へと立ち返らせたいと望んだ。しかし神の霊は、邪悪な王と背教の民の罪を戒めるようエリヤに臨んだのと同じく、彼らにも臨んだ。彼らは、それまで述べるのをためらっていた教理、すなわち聖書の平明な言葉を宣べ伝えずにはいられなくなった。彼らは、真理と魂を脅かす危険とを熱心に宣言するよう駆り立てられた。主が彼らに与えた言葉を、結果を恐れることなく語り、人々はその警告を聞かざるを得なかった。

こうして第三の天使のメッセージは宣べ伝えられる。やがてそれが最大の力をもって与えられる時が来ると、主はへりくだった器を通して働き、ご自身の奉仕に身をささげる者たちの思いを導かれる。働き人たちは、教育機関の訓練によってではなく、むしろ御霊の油注ぎによってこそ適格とされる。信仰と祈りの人々は、神が彼らに与える言葉を宣べるため、聖なる熱情に駆り立てられて出て行く。バビロンの罪は明るみに出される。国家権力によって教会の儀式や規定の遵守を強制することの恐るべき結果、心靈主義の侵入、教皇権のひそやかにして迅速な進展-これらすべてが暴露される。これらの厳粛な警告によって、人々は揺り動かされる。これまでこのような言葉を一度も聞いたことのない幾千幾万の人々が耳を傾けるだろう。彼らは驚きながら、「バビロンとは教会のことであり、天から送られた真理を拒んだため、その誤りと罪のゆえに墮落したのだ」という証言を聞く。人々が熱心に「これらのことは本当なのか」と問いつつ以前の教師たちのもとへ行くと、牧師たちは彼らの恐れをなだめ、目覚めた良心を静めるために作り話を持ち出し、耳ざわりのよいことを預言する。だが、多くの人々が単なる人間の権威では満足せず、明白な「主はこう言われる」を求めたので、世に受けのよい聖職者たちは、昔のパリサイ人のように自らの権威を問われて怒りに満ち、そのメッセージをサタンのものとして非難し、それを宣べる者たちをのしり迫害するように、罪を愛する群衆を扇動するだろう。

論争が新しい領域に広がり、人々の心が踏みにじられてきた神の律法へと呼び戻されるにつれて、サタンは活発に動き出す。メッセージに伴う力は、それに反対する者たちをただ激昂させるだけである。聖職者たちは、その光が自分たちの群れに照りつけることのないよう、それを遮るために、ほとんど超人的な努力を払う。彼らは手中にあるあらゆる手段を尽くして、これらの重大な問題の討議を抑え込もうとする。教会は世俗の権力という強腕に訴え、この働きにおいて、教皇派とプロテスタントが手を結ぶ。日曜遵守の強制を求める運動がいよいよ大胆かつ断固たるものになるにつれ、法律は戒めを守る者たちに対して発動される。彼らは罰金や投獄をもって脅され、またある者たちは、信仰を捨てさせる誘因として、影響力ある地位や、その他の報酬や利得を提示される。しかし彼らの揺るがぬ答えはこうである。「神の御言葉から、私たちの誤りを示してください」-それは同様の状況下でルターが述べたのと同じ嘆願である。法廷に引き出された者たちは、真理を力強く弁明し、それを聞く者の中には、神のすべての戒めを守る立場に立つよう導かれる者もいる。このようにして、さもなければこれらの真理を何一つ知らずにいたであろう幾千という人々の前に、光がもたらされる。『大いなる論争』 605、606ページ。